

ガーリック + 通信



第26号 2011. 8. 20 発行

今年もアイソトープ・放射線研究発表会に参加しました！！



2011年7月6日(水)～7月8日(金)「アイソトープ・放射線研究発表会」が日本科学未来館で開催され、3年連続円卓会議からも参加しました。7月7日(木)に市川さんが「食品照射のリスクコミュニケーション：消費者視点を生かしたコミュニケーション活動」、飯塚が「果物やアルコール飲料への放射線照射の効果」と題してポスター発表を行い、7月8日(金)午後には、千葉さんが「食品への照射効果の体験実験ーリスクコミュニケーションーを目指してー」と題して口頭発表を行いました。

また、昨年に引き続き、7月8日(金)15時から、円卓会議主催の公開講座『一市民のためのしゃべり場ーみんなで語る「食の安全と放射線・放射能」』を行い、44名の方に参加していただくことができました。プログラム途中のグループ討論は当初15分の予定でしたが、議論が白熱し2度に渡って時間を延長するほどでした。

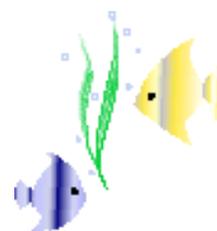
この公開講座の開催にあたり、日本アイソトープ協会の西島様、稲毛様をはじめ、多くの方々のご理解・ご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

(飯塚 記)



CONTENTS

1. 口頭発表・ポスター発表しました . . . P. 2
2. 市民のためのしゃべり場 プログラム . . . P. 3
3. 発表していただいた意見交換概要 . . . P. 4
4. 参加者の「振り返りシート」から . . . P. 5
5. 円卓会議から参加された皆さんの感想 . . P. 7
6. しゃべり場を開催して P. 9



1. 口頭発表・ポスター発表しました！！



口頭発表を行って（千葉 記）

食品への照射効果の体験実験—リスクコミュニケーションを目指して—と題して、「放射線教育・コミュニケーション」というグループの最後に報告しました。

この学会において、およそ場違いな「素人のおぼちゃん」が専門家を前にして、いったい何を話すのか？、素人には嫌われものと考えられている「食品照射」について、体験実験を重ねて学会発表まで複数回するのは、どういうわけか？、疑問や不審でいっぱいには違いありません。それで、自己紹介や円卓会議の紹介を兼ねて、興味を持った経緯を最初の方に入れました。私が「学会」と名のつくところで口頭発表をファーストとするのは、初めてですから、また、内容がリスコミを目指すものなので、要旨には書かなかったそういう部分を入れてかまわないだろうと考えました。

「笑いをとれるかも」と期待した部分も含めて、どなたも笑わず、最初から最後までシンとして、私の予想より多い人数の方々が聞いてくださいました。

質問や意見がいくつか出ました。素人で、不勉強な私が答えられないような質問には、一緒に名前を連ねてくださっている先生方に答えて頂こうと、あらかじめ思っていたので、あまり辛く思わずにすみしました。

今春、ニュースになったせいか「生肉を照射して試してはいないか？」といった質問もありました。照射していない生肉は非常に危険で、食べるわけにはいきませんから、他の食品のように「非照射と照射の比較」はできません。このように円卓会議の素人のメンバーができることは非常に限られています。「生菌数を測定する」といったことは、文献を探るか、その道の専門家に頼むしかなさそうです。

この先、研究をどう進めるか、先生方も含めて、考えないといけないでしょう。ただ、とりあえずは、一般消費者が照射食品について知ろうという気持ちになれるような、適切な例を探していきたいと思います。

その一環として、照射した香辛料で作るカレーと、加熱殺菌した香辛料で作るカレーを、先日、再度比較しました。香辛料は一般消費者が照射食品のメリットを感じやすいものだろうと思うからです。これについては、別号でお知らせしたいと思います。



ポスター発表を行って（飯塚 記）

3 回目のポスター発表をさせていただきました。毎回要旨作成でつまずき、リスコミ班の皆さんに迷惑をかけ、叱咤激励されながら要旨を完成させています。その後、追い込まれた短期間でポスター作製。気持ちとしては画期的なポスターを作りたいのですが、なかなか思い通りにはいかず、今回は表ばかりのポスターが出来上がりました。

毎回、実験の発案・観察・まとめをほとんど千葉さんのリードにより進められているため、自分自身が発案、まとめなどしていないものを私が発表して良いものか悩みます。

今回は7月7日(木) 13:00~13:30 がポスター発表責任時間で、公開講座とは異なる日でしたので、2 時間半ほど会社を抜け出し会場には1 時間程しかいることが出来ず、陽のあたる明るい会場で長閑な雰囲気の中、責任時間があっという間に過ぎました。何人かの方に質問されたりしましたが、他力本願で行ったポスター発表は勉強不足で中途半端なものとなり、反省しきりでした。

2. 『市民のためのしゃべり場プログラム』

日 時：2011年7月8日（金）15：30～17：30

会 場：日本科学未来館7階 CR2 会議室2

主 催：食のコミュニケーション円卓会議

共 催：日本アイソトープ協会、日本食品照射研究協議会

出席者：44名（内、バズセッション参加者32名） 含円卓会議会員

配布資料：「ガッテン！食品照射」（社）日本原子力産業協会

ミニ講座 レジューメ「被曝食品?!放射線を浴びた食品を食べても大丈夫なの」

《しゃべり場スタート》

15:00-15:10 開会

15:10-15:50 ミニ講座 放射線と放射能の基礎から「食べても大丈夫？」まで（小林泰彦）

15:50-16:00 質疑応答

《バズセッション》（ファシリテーター：市川まりこ）

16:00-16:10 オリエンテーション（5グループ）

1) 6～8人ずつに分かれて着席したグループ内で、自己紹介

2) リーダーと書記の決定

ワークショップの進め方を説明、リーダーと書記の決定

16:10-16:13 隣の人同士で意見交換

16:15-16:45 グループの中で意見交換

16:45-16:55 各グループのリーダーから結果発表

16:55-17:10 全体で質疑応答

17:10-17:15 「振り返りシート」記入

17:15 閉会



3. 発表していただいた各グループの意見交換概要

Aグループ：6名(男性3名、女性3名)

テーマ：なぜ正しく怖がれないのか？！

- ・報道が分かりづらい。
- ・正しい情報を選ぶ能力・訓練がされていない。
- ・行政に責任転嫁せず、自己の判断で情報の選択をしていく。
- ・リスクゼロはあり得ないという基本的な考えをもっていない。

Bグループ：6名(男性6名)

テーマ：ゼロリスクと風評被害

- ・マスコミは話題性があるものしか報道しない。
- ・ゼロリスクを求める風潮を改めるべき。
- ・誤解・過剰反応してしまう
- ・「風評被害」は人によって意味することが異なるように思う。

Cグループ：6名(男性4名、女性2名)

テーマ：安全の基準

- ・国の説明が不十分、今からでも一旦リセットしてわかり易く明確な基準を出し直す。
- ・子ども向け、乳児向け、成人向け、老人向けに分ける。
- ・人によってグレイゾーンの違いがある。

Dグループ：8名(男性3名、女性5名)

テーマ：風評被害

- ・風評被害に対する概念。
- ・食品からの内部被ばくのリスクの大きさを暫定規制値から想像することができない。
- ・情報を正確に発信することは難しいが、続けていくしかない。
- ・受け手の心情で、情報がいろいろ誤って伝わっていく。

Eグループ：6名(男性3名、女性3名)

テーマ：食の安全

- ・病原性大腸菌で汚染した生肉で小児が死亡しているが、基準を超えたセシウムを含む食品を食べても死ぬ心配は無い。このようにリスクの大きさはあきらかに違うのに、一般の人が放射線のリスクを大きく感じるのはなぜか？
- ・安全性についての尺度を作っては？



4. 参加者の「振り返りシート」から

- ・しゃべり場参加者 32名（男性19名、女性13名）
- ・アンケート回収数 25名

《 1. 特に印象的だったことは》

- ・放射線は、ガン以外には影響がない。
- ・暫定基準値の「暫定」の意味を覚えてもらった。
- ・テーブルトークで皆さんと積極的に発言されたこと。
- ・100 mSv以下の低放射線量では、全く影響が無いということを初めて知りました。
- ・あらためて100 mSv以下の低線量の安全性について理解。
- ・専門性の高い立場の方が多く出席されていたため、ニュアンスの違いを感じましたが、自分は心配し過ぎ？と思える場面が多かったです。
- ・参加者の皆さんが議論にすごく慣れていること。
- ・個々の意見が聞けたこと。
- ・水道水→ミネラルウォーターによるリスク。トータルなリスク視点は大切と思っていたし、ミネラルウォーター購入の経済(リスク)影響も考えてはいたが、発癌物質では考えていなかった。
- ・こういう活動をされている団体の存在を始めて知った。
- ・思ったより専門家の方が多かったので驚きました。
- ・100 mSv/年以下は安全。
- ・0リスクはやはりない。
- ・小林さんの講演がまとまっていて良かった。
- ・全く異なる分野の人と直に話せる機会は貴重。
- ・グループディスカッションでグループ内の人の意見を聞けたこと。
- ・自由討論。
- ・時間のなさ。あおられている感じ。



《 2. もっと知りたいことは》

- ・3. 11以来の放射線が人体におよぼす影響。
- ・国の基準値の算定ポリシー。
- ・放射能について、わかりやすく話すこと。
- ・本当に安全な食品を流通し続けることが出来るかどうか。
- ・食品照射に対する国のスタンスの変遷。
- ・暫定規制値が食品安全委員会を通していないという事だけで、安全と判断しても大丈夫ですか？
- ・放射能・放射線のこと(食品のこと、暮らしの中でのこと)
- ・チェルノブイリの時の汚染食品の量、環境に関するデータ。
- ・照射食品について。
- ・それぞれの参加者の考え。
- ・実際に今の福島県の給食(福島県産で！と言っていたと思うので)と同じ食事×3×365でどれくらいのかBq→Svとなるのか？などの具体数値。

- ・食品照射方法について具体的に知りたかった。
- ・放射線について、ガイガーカウンター。
- ・放射線のメリット(デメリットはなんとなくわかるけど)。
- ・食品に関する暫定規制やベクレルからシーベルトへの変換について。
- ・科学的に知りたいことは、自分で本やインターネットで調べられるのでありません。ただ、様々な意見や考え方を知りたい。
- ・講義がよかったです。もう少し時間を割いても・・・

《 3. 本日のご感想をお聞かせください 》

- ・私達のくらしの中で放射線が使われているということを知った。
- ・計算してパッと出せる結論のない問題だと思いました。
- ・短い時間で密度深く話すことができた。
- ・国が信頼されていないと思った。(私、個人的には充分ではないがよくやっていると思っている)
- ・初めて参加しましたが、なかなか有意義でした。
- ・ものすごく専門的で考えがまとまっていない状態ですが、様々なご意見を拝聴できたことを感謝します。
- ・Aグループについて→情報と報道 この二つについてみなさんの考えを知ることができたことがよかったです。
- ・いろいろな立場の意見が聞かれた。
- ・時間が短かったです。
- ・グループワークは良いと思います。異業種間で、異なる考え方のコラボは気がつかなかったことを気がつかせてくれるきっかけとなるから。
- ・いろいろな立場の方々とお話できてとても参考になりました。時間が少なかったのが残念です。
- ・もっとこういう場があればいいと思います。
- ・議論にもう少し時間がほしかった。
- ・自由討論が難しかった(自分たちでテーマを決めて等々には時間が短かった)。かなり追い立てられてしまいました。

小林先生のお話は自身に役立つものでした。(講演←ママ中心、学生へなど)

- ・始めて会った方と話し合いが出来て良かった。
- ・時間が短いように感じました。短い中でも面白かったです。ありがとうございました。
- ・基本的な所が理解できたかと思う。
- ・時間が少ない。ワークショップ形式はよかったが時間切れで不満。スタッフの皆さんお世話さまでした。
- ・意見交換の時間が短い。
- ・進行に無理がある。
- ・Bグループは男性ばかりで「安心」に関しては冷淡でした。「安心」は日本人のDNAに深く刻まれている。リスクだらけの欧米人よりも幸せなのかも知れない。
- ・進行がスムーズでなかった。グループディスカッションを任せたら途中でマイクを使って介入するのはやめて欲しいと思いました。グループディスカッションの時間をもっと多くして欲しいと思います。テーマは固定しない方が良いと思います→食品に関することだけくらいのしぼりで十分だと思います。(すいません。私も司会をする時に良く言われますが自分がグループディスカッション

をすると特に感じました)

- ・グループ討論時、男性だけだったので男性的な討論となった。まんべんなく男女比を同じにした方がよかったのでは。
- ・興味深かったです。

《 4. その他、思うところ等自由にご記入下さい。 》

- ・今回一般市民として参加させていただきました。このような会があることは、たまたま目黒の消費生活センターの講座で市川先生により知りました。専門家と一般の者が話せる素晴らしいことだと思いました。
- ・リスクと経済性のせめぎ合いのおとしどころは難しいですね。
- ・3時からではなく、1:00～5:00まで時間をとっていただきたかった。時間が足りませんでした。こんなに有意義な意見交換ができると思っていませんでした。来て良かったです。ありがとうございました。安全・安心の定義をしたいと思います。ママカフェおりづらん運営していく上で重要と思いました。
- ・最後に小林先生がおっしゃられた世界の放射食品事情についてはぜひ次回よろしくお願いします。
- ・来年も参加したいと思います。
- ・もう少し専門的な所がない様な説明があれば・・・
- ・お世話の方、御苦勞様でした。有意義でございました。
「被曝食品」という言葉はよくないと思います。
- ・原発事故が頭を活性化したと考え、年令的な限界まで頑張りたい。

5. 円卓会議から参加された皆さんの感想



市民のための公開講座に初めて参加しました。

今回のテーマ「食の安全と放射線・放射能」は、皆さんの関心が高く、質疑応答も活発でとてもよかったと思います。講師だけではなく、会場からも質問に答えていただけ、みんなで語るにふさわしい雰囲気でした。しかし、時間が短く、予備知識がある方にはよくわかりましたが、初めて聞く方にとっては、理解するのは大変そうでした。

グループは6名でしたが、講師の方を向いて一方的に聞くだけではなく、いろいろな方と話す時間があつたことは、受け身ではない参加という気がして有意義だったと思います。ただ、グループ内でテーマを決めてまとめて全体に発表するのは、この時間内では消化不良でした。グループのメンバーは、放射線の話を知るの初めての方や、放射線のことはよくご存知の方、仕事も様々な立場の方でしたので、皆さんと「食の安全と放射線・放射能」について自由にお話しする時間が欲しかったです。(国原 記)



今回は受付を担当し、途中からの参加となりました。

グループディスカッションは、「そもそも風評被害ってなに？」というところからはじまり、グループメンバーのそれぞれの認識の違いから、「テーマについて話合う」という段階には至らず、人数的にも一番多かったグループだったこともあり、時間が圧倒的に足りず、消化不良でした。(坂上 記)



今年の「しゃべり場」は最初の計画通りに行かなかったわけですが、私としては初めて参加してみて話題がタイムリーなこともあり、私の所属した班では活発な議論もあり楽しく参加できました。

班としては発表者が決まるまで少々時間がかかりましたが、班のテーマとして「なぜ正しく怖がれないか」として、これに必要な要素について意見を出し合いました。

同じ班になった方は、それぞれ一言お持ちのようで多くの意見が出ました。それらを要約すると、

- 1) 正確な情報が使いやすい(見やすい) 状態で提供されないこと
- 2) 一方で、提供されている情報を上手に拾って使えないこと
- 3) 日本国民に自己責任が欠如しているのではないか

との3点になりました。この解決のためには、行政や関係者が適切かつ扱いやすい、言い換えれば分かりやすい情報提供に心がけることと、教育において情報の収集・分析能力をつける訓練がなされることが望ましいということになりました。それらによって科学リテラシーが向上できるなら、自己責任で行動することと、政府なども各自の自己責任を認める対応が必要ではないかとの結論になりました。具体的に言えば、暫定的避難地域に残るか残らないかなども各自の判断に任せて良いのではないかという、意見も出ました。

今回のしゃべり場ですが、時間的にはなかなか難しいところがありました。もっと時間がほしいという方もいましたが、最初の情報提供から意見交換という「しゃべり場」の構成を考えると仕方ないところかと思えます。

時間が不足したという点については別の見方もあると思えます。どのようなときでも持ち時間というのは無尽蔵にあるわけではないので、与えられた時間内で要領よく話せるかというのも重要なことです。全体を見渡して実は意外とその様な訓練がされてない場面も見受けられました。持ち時間が2分と5分では話せることは同じではありません。時間が少なければポイントを絞って詳しく説明するか、話題の数を減らさないなら個々の詳細な説明を省くなど、状況によって選択する判断が必要になります。

サイエンスアゴラで行うディベートは、意見のとりまとめと主張が限られた時間内に凝集されているものですので、多くの方がディベートに興味を持って来ていただけたらうれしいです。いずれにしても、初めてあった人と意見交換することは様々な勉強になります。この様な機会が増えることを期待しています。

(田部井 記)



昨年度は仕事を休めなくて、アイソトープ・放射線研究発表会での円卓主催の公開講座に出られず、残念だったので、今年は出席できたという意味でラッキーでした。

小林さんの講演後、質問や意見がたくさん出ました。私のメモによると、5名の男性と1名の女性が質問など、自分から手を挙げてお話ししました。わざわざ、このような会場にいらしてウィークデイの午後に参加してくださる方は、「知りたい」「言いたい」気持ち強い方なのだろうと思えます。

私にしてみると、「今さら聞けない」質問もあり、小林さんのお答えを伺いながら、知識を確認できて良かったです。

私は、受付の仕事を飯塚さんや坂上さんにお任せして、比較的早くからグループの中に入ったので、外部からの参加者の立場をある程度経験することが出来ました。参加者の感想にありましたように「時間が短かった」「グループ内で話している最中に、司会の人何か言うべきではない」というのが身に染みました。グループに入っていなかった市川様は、会が終わってから円卓のメンバーを主とした気楽な場で「(時間は)あのくらいが良いのよ。」と、マイペースの発言をしていましたが、翌日になって落

ち着いて思い出し「立場の違いを考え合わせないと、より良い公開講座にならない」と思い、あえて書いておくことにしました。

私は6名のグループでしたが、時間が非常に不足している感じがしましたので、出来れば1グループ多くて6名、理想は5名であるような感じです。ただし、参加者が多いと、最後の方の、各グループの報告が長くなるので、大変ですが・・・。

ともかく、いつもと異なる立場に立つことにより、自分を客観視できる貴重な体験をさせて頂いたことに感謝します。
(千葉 記)

6. しゃべり場を開催して



幻のテーマは来年へ (市川 記)

今年で2回目になる市民のためのしゃべり場は、当初、『世界が語る食品照射 「食べ物に放射線？」』というテーマで、米 仏、ベトナム、インド、韓国 豪などの大使館関係者による「こんな風に使っています。日本が許可するとこんなメリットあります」というようなプレゼンテーションを予定していました。しかし、3月11日の東日本大震災による原発事故の影響などにより、大幅な変更を余儀なくされ、みんなで語る「食の安全と放射線・放射能」というテーマで実施することになりました。

今回は、原発事故に関連して食品中に検出された放射性物質による健康への影響について、正しい情報をもとに意見交換しながら疑問を解消するとともに、市民が自分の問題として「食の安全」と「放射線・放射能」について、自分の言葉で語り、適切な理解を進めていくことを目的としました。また、食中毒防止や検疫殺虫など「食の安全」のための放射線利用の現状も知ることで、「食の安全」と「放射線・放射能」について冷静にバランスよく判断するためのきっかけ作りにもなればと考えました。

意見交換に用いたバズセッションという手法は、少人数のグループに分かれて、リーダー進行のもとにテーマについて 討議し、グループごとに見解をまとめて報告させる討議の技法です。ワークショップに慣れていない方にも、あまり難しくなく、自分の意見を出せることで参加の臨場感が味わえることを期待して取り入れました。限られた時間の中で進めていくために、時には話の中に介入したり、後何分ですよと急ぎ立てたりしました。

アンケートの中で、時間がもっとあれば・・・というような感想をたくさんいただきましたが、いくら時間があっても全員が満足できる時間は多分用意できないものだろうと思います。時間を短く感じることは、ある意味充実しているということの表れとして受け止めることができると思いました。

小林さんの講座、放射線と放射能の基礎から「食べても大丈夫？」は、大変わかりやすく、パワーポイント資料も充実していました。参加者からの質問も多く、関心の高さを感じました。多様な立場の方々が多様な意見を交換し合うことで、新たな気づきがたくさんあったのではないかと思います。参加して良かったという言葉がうれしく受け止めました。

幻となったテーマ、世界が語る食品照射 「食べ物に放射線？」を、来年はぜひとも実現させたいと願っています。



食品と放射線・放射能、今年が意識の転換点となるか…？

～共催した日本食品照射研究協議会の立場で～ (小林 記)

レジュメの「被曝食品」という表現は不適切というご指摘がありました。確かにその通りですが、敢えてそう書いたのは訳があります。今回の原発事故の直後から、食品関係の事業者の方々から多数の問い合わせがありました。そして、その大半は、放射能と放射線の区別もあいまいで、まさに「被ばく食品」という漠然とした恐ろしげなイメージをお持ちのようだったのです。

放射能も放射線も、自然界の一部であり、意識しようがしまいが我々はそれから逃れることはできません。それらの性質を正しく理解し、危険を避けつつ上手に利用して、より安全で豊かな社会を作っていくしかない訳です。しかし、日本国民のほとんどが、放射線についての知識がほとんどないために、必要以上に怖がり、無理に避けようとしてしまうのが現実だったと思います。

これまで「放射線照射食品」について説明する際には、放射能と放射線について一から説き起こし、それでもなかなか理解してもらえないことが常でした。それが、まさか、一般の人が、こんなにベクレルだのシーベルトだのを口にする日が来ようとは…。

今回の不幸な事故をきっかけに、放射能と放射線にいやでも向き合うことになった人々が、衝撃を乗り越えて、冷静に情報を得て、平常心で判断できるようになれば、素晴らしいことと言えるでしょう。それは、照射食品の社会的受容のような狭い範囲に限らず、診断や治療で使われる放射線に対する無用の不安や過剰な心配の克服だけでも留まらず、さまざまな「食のリスク」についても科学的で冷静な判断ができるようになるという希望に繋がります。

リスクコミュニケーションとは、一言でいえば「情報と判断の共有」、つまり、誰しもが偏った情報に基づいてそれぞれ勝手に判断してしまいがちな状況の中で、関係者の間で少しでも情報と判断を共有するための努力といえるでしょう。放射線と放射能についても、食の安全についても、今回のようなリスクコミュニケーション活動の積み重ねによって、情報と判断の共有が進めば進むほど、日本がよりよい社会になり、日本人の誰もがより幸せになると信じて…

編集後記

今年の「市民のためのしゃべり場」は昨年に比べて 20 名ほど参加者が少なかったのですが、事前参加申込みをしてくださった方が多く、今回は様々な立場の方に参加していただけたと思います。

グループ分けでは昨年同様「くじ」で決めたため、各グループの男女比に差ができ、中には男性だけのグループもありました。参加する円卓会員と事前打合わせがあまり出来なかったこともありますが、司会や指示だけに頼らず、会員が率先して動くなどの必要があったのではないかと感じました。

『みんなで語る「食の安全と放射線・放射能」』というタイムリーな議題でしたので、自由討論では各グループ共議論が白熱し、時間が足りなかったというご意見が非常に多いことが印象的でした。興味・緊急性・自分や家族に直接関わってくるのが議題の場合、話は尽きず、自分の意見や不安を言えるまで、あるいは自分が求める答えや意見が聞けるまでは時間が足りないと感じてしまうのかもしれないと思いました。この「しゃべり場」という空間に様々な立場の人たちが集まり、全員が発言するというスタイルの話し合いに参加され、不安や悩みが解消出来る手助けになったのではないかと信じたいです。終了後、自然とグループ内で名刺交換が行われていたことが討論の質を表しているのかなと感じました。(飯塚 記)